

琉球語からみた古事記の「意」「富」字の 音価

山田, 實

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

2

(開始ページ / Start Page)

231

(終了ページ / End Page)

263

(発行年 / Year)

1975-10-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013114>

琉球語からみた古事記の「意」「富」字の音価

山 田 實

はじめに

『古事記』には、万葉仮名の「意」「富」の文字が他の奈良朝文献のものよりも多数用いられている。「意」字は、古事記に次いで万葉巻五に多く用いられている。「富」字は、ほとんど古事記にその例が多く用いられているのに対し、書紀や万葉には数例が散見されるのみである。古事記は、「意」「富」の仮名字を多量に用いている点、「母」と「毛」との音韻上の区別をして用いている点、これらは他の奈良朝文献には見られぬものであるから、何といっても我が国現存の文献の中では最古の典籍であることを疑う余地はない。これらは、まさしく古事記の古さを証拠づける特色をなすものである。

古事記は、八世紀初頭の奈良朝本土語の中央方言の大部分を記述したものであるが、七世紀末期の中央

方言の若干をも併せ記録したもののようである。「意」「富」を用いて記述された語形は、七世紀末期のものが多かったのではなからうか。古事記に表わされた当時の言語および記録されない当時の言語を「古事記言語」または「古事記語」と呼んで置く。古事記言語は、確かに日本書紀語や万葉語一般のものとは異なり、古形を示したものを多く記述している。

古事記の「意」については、従来「オ」と訓みならされているが、その音価についてはまだ明らかにされていない。また、「富」については、「ホ」と訓むのが一般的であるが、「ホ」の乙類とみる説もある。（福田良輔先生の『奈良時代東国方言の研究』）しかし、その音価については明らかにされていない現状である。

「上代特殊仮名遣」の学説が橋本進吉博士によって公表されてから、もはや六十年近くにもなろうとしているのに、その音価推定がいまだになされないという事実は一体どうしたことであらうか。どこか研究方法にまずさがあるのではなからうか。それとも「上代特殊仮名遣」は古代日本語には存しなかったと見るべきものであるのか。いろいろ考えさせられる。けれども筆者は、「上代特殊仮名遣」は認められるべきものであると確信している。いまだにその音価推定が進まないのは、どこか研究方法に欠陥があるのかも知れない。現代琉球語は、片仮名や平仮名をもってしては完全に記述し得ない。同様に古代本土語も万葉仮名では完全に記述し得ないものであったと見られる。万葉仮名で記述した奈良朝本土語は、ごく概略的な語形が写し出されたものにすぎない。ローマ字や音声表記または音韻表記の発達しなかった時代であるから、不完全な表記をした万葉仮名の上からのみの音韻や語形推定は、あるものについては危険をさえ伴

なうものである。

奈良朝語の甲乙兩類の音韻を推定する場合心掛けるべき重要な点は、奈良朝の中期およびそれ以前の時代のものと、奈良朝の末期および平安朝初期の時代のものとは、音韻（音形・音相）が異なるということである。前者の時代では、たとえば、*ka* に対する *ka a*、*ki* に対する *ki i* または *ki i*、*ku* に対する *ku u*、*ke* に対する *ki e*、*ko* に対する *ku o*、などのような音韻の対立（モーラの区別）が表わされていたものと見られる。それに対し後者の場合は、*ka* : *ka a*、*ki* : *ki i*、*ke* : *ke e*、*ko* : *ko o*、などのような対立で表わされていた可能性が強いであろう。助詞の「モ」は、古事記言語では *mu o* / で、書紀や万葉語では *mo o* / で、奈良朝末期および平安朝初期では *mo* / で表わされていた可能性が強いのである。それ故に、例えば「登」「等」を奈良朝末期や平安朝初期の文献に用いてあるからといって、その音価が奈良朝中期以前のものと同じであったと考えるはならないのである。文字は同じであっても時代によってその表わす音価（音形・音韻論的音節）は異なるのである。なおまた、古事記語に表わされた形がそのまま史前日本語のものと同じであるとみてはならないことである。古事記言語が成立するまでには幾度かの音韻変化の過程があったと見なければならぬのではあるまいか。古事記言語と六世紀の推古朝語（または飛鳥朝語）のものとは異なっていたようである。たとえば、「姫」を古事記言語では *pi me* / で表わし、推古時代では *pi mi* / で表わしていたように。

現代琉球日本語は、変化しすぎた点が多いのであるが、奈良朝本土語のものよりも古形と見られる要素もかなり存する。両言語の比較研究によって古代琉球語を推定すれば、古代琉球語は奈良朝本土語よりも

日琉共通基語の言語相を多く留めていることが判明するであろう。

本稿は、古事記の「意」「富」字を中心として、書紀や万葉のものをも扱いつつ、それらの文字の用いられた語形を琉球語と比較して、当時の本土語や琉球語の音価ならびに語形を推定すると共に、日琉共通基語のものを推定してみたいと思うのである。なお、奈良朝本土語のハ行子音は h で表わされ、サ行の音節（モーラ）の頭音は sh で表わされていた、ということについては、拙論「日琉語の動詞終止形の構成について——上代のハ行音・乙類「と」音・サ行とシャ行の音を含む——」（『沖縄文化』四一号）、に述べて置いたので、本稿にはそれらについては触れないことにする。

一、「意」字とその音価

二人称代名詞を示す語形

古事記語の例

亦追^一撥河之瀬^二而、意禮^{以音}為^二大國主神^一（神代）

伊賀^{以音}所^二作仕奉^一於^二大殿内^一者、意禮^{以音}先入、明^一白其將^レ為^二仕奉^一之状^上而（神武）

意禮熊會建二人、不伏無^レ禮聞看而、取^一殺意禮^一詔而遣（景行）

これらの「意禮」は、二人称代名詞を示す形の例である。従来「オレ」と訓まれている。『時代別国語大辞典上代編』には、二人称。罵っている場合に多い、と説明してある。日本古典文学大系一『古事記祝

詞』(岩波)には、お前とか、おぬしとかの意。第二人称の卑称、と注書がしてある。

日本書紀語の例

爾此云^フ飫例(神武)

なお、上掲の辞典には、「考」のところで、「爾」は漢籍の史書の会話文や小説・仏典類などに例が見え、俗語的な人称代名詞である、と述べてある。

「意禮」は、次に示す奄美与論方言との対応の上から、ヲウレエと訓み、wu re e の形で発音していたのではないかと見られる。書紀の「飫例」は、wo re e (∧wu re e) の形で表わされていたのではあるまいか。wu- ∨ wo- の変化をした形で書紀には表わされていたようである。古事記の「意」字は、ヲウ(wu)と訓むべきものであろう。

与論方言

‘u re e へあなた、そなた」

与論方言のものは、‘u ree ∧ wu re e の関係を示し、wu ∨ ‘u の変化をした‘u- が語頭に表わされている。(以下、は、ある音素の脱落したことを示す記号として用いる。)

与論方言の‘u re e は、卑称の二人称代名詞としては用いられていない。果たして上掲古事記の「意禮」や書紀の「飫例」は卑称語であろうか。古事記神代卷の例の「意禮」は、大国主神に対して言ったものであるが、それが卑称や罵って言ったものであろうか。卑称語だと決める確証はないのではなからうか。それで従来の解は疑わしい。与論方言の‘u re e は、次のように用いられる。

複合名詞を構成する場合

'u re e ja a 《あなたの家(家屋)》

'u re e ji ma 《あなたの島(郷里)》

'u re e 'u ja 《あなたの親》

'u ja < wu ja (親) を示すのであろう。

文構成の場合

'u re e ja a ja ? i du ru ga 《あなたの家は、いづれ(どれ)ですか》

'u re e ji mo o ? i da ga 《あなたの郷里(ふるさと、部落・島・生地)は、どこか》

ji mo o は、ji ma 《島・郷里》の語形変化形で《島が、しまは》の主格の意味を表わす形である。上の

文例は、助詞を介さず直接体言に接して文を構成している。

'u re e mu Q tji ta ba a ri 《あなたが(あなたは)、持ってくださいませ》

mu Q tji < mu tji < mu ti 《持つ》を示す。ta ba a ri は、ta ba a ru 《賜ばる、くださる》の連用兼命令形である。上の文は、用言に直接に接する場合の例である。

'u re e ga ? i ju ji ja ? a ta ra zi 《あなたが言っていることは、当らない(当たっていない)》

-ga 助詞に接しての文構成の例である。? i ju ji の ji は、《こと、もの、それ、人》などの意味を表わす指示詞の機能を表わす語である。

'u re e ja ta bi ka ti e 'N mu i 《あなたは、旅に(旅へ、旅の方へ)、行こうとおもいますか》

e.N / e.m / e.mu / e.mun を示し、行く、行かれる、おいでる、おわします、来る、来られる、などの意を表わす多義語である。mu.i / mun pi. 《思ヒ》を示す語ではないかと見られる。文末に立つて疑問の意を表わす語である。上の文は、助詞に接する例である。

古事記の文構成

意禮、大国主神と為り（神代）

意禮、先づ入りて、其の仕へ奉らむとする状を明し白せ（神武）

意禮、熊曾建二人（景行）

意禮を取り殺せと詔りたまひて遣はせり（景行）

仮名書例でないからはっきりとは言えないが、wu re e が直接体言に接する場合、副詞に接する場合、助詞の「ヲ」に接する場合、の用法が用いられていたようである。

「意禮」の「禮」が、re e の形であったろうということは、単なる文献上の文字のみの上からだけではいつまでたっても明らかにはされない。生きた言語と比較することによってそれが明らかにされうるのである。「意」字は、o. を示すものでもなければ、wo. を示すものでもなさそうである。もし wo. を示すものとみた場合、wo. から与論の pi. が生ずる説明はしにくい。wu / pi. の現象は琉球語に表わされている。たとえば、与論方言には wu pi. (または wu bi) 《居リ》が表わされるのに対し、奄美本島では、pi. pi. (/ wu pi.) の形が表わされている。それで、与論方言の二人称代名詞の pi. re e は、その前身形 wu re e であったとみて誤りはあるまい。古代琉球語や日琉共通基語では、*wu re e が二人称代名詞として用

いられていたと推定することが可能である。

「大きい」の語幹を示す形

与論の高齡者の中には、《大きくなった者、成人者、身長の高い人》のことを、*wu pu zi mu nu* といっている。一般には語頭の *wu-* の *w-* を脱落して、*n pu zi mu nu* の形で発音している。*mu nu* $\wedge$ *mu nu* $\wedge$ *mu nu nu n* 《物・者》を示す。また、高齡者の中には「兎」を *wa sa gi* で発音する人がいるが、一般には *'u sa gi* ($\wedge$ *wu sa gi*) の形で発音している。このように、与論方言には $\wedge$ *wu* $\vee$ *'u* $\wedge$ の変化現象が表わされている。与論方言の *wu pu-* や、*'u pu* は共に《大きい》の語幹を示す形となっている。次に示す例のように語形を構成している。

'u pu mu nu ($\wedge$ *wu pu mu nu n* $\wedge$ *wu pu mu nu n*) 《大物、大きな物》

'u pu ja a ($\wedge$ *wu pu ja a*) 《大屋・大きな家屋》

'u pu pi tju ($\wedge$ *wu pu pi tu* $\wedge$ *wu pu pi tu n*) 《大きな人》

麦屋字では人を *pi tu* ($\wedge$ *pi tu n*) の形で表わす。

'u pu gu ni ($\wedge$ *wu pu ku ni*) 《大きな国》

'u pu a m ma a 《年長の母》

次に示す活用語が用いられている。

(*'u pu ji*) 《大きい、大きくしている、の意の終止形であるが、稀用のものとなっている》

'u pu u ji 《とても大きくしている、とても多くしている。形容詞比較級の終止形》

ˈu pu ku 《大きく、多く。連用形》

「大きい」を意味しての形容詞の活用語は乏しい。首里方言では、次に示す形で用いられている。

? u hu (ˈu fu < wu pu)

『混効験集』には、「おへち」。原注「大きを云」とある。当時の実際の語形は、ˈu ti sa または ˈo ti sa で表わしていたかも知れぬ。この形は後に記す与論方言の ˈu pi sa に対応するものであろう。与論や首里の《大きい》の語幹は、古代琉球語においては、*wu pu- で用いられていたと推定され得る。この *wu pu- に一致する形が、古事記語には数多く表わされている。

古事記語の例

意富迦波良 wu pu ka pa ra (< wu pu ka pa pa ra) 《大河原》(景行)

意富加牟豆美命 wu pu ka mu du mi - nuo - mi ku o tu o 《神名》(神代)

意富岐美 wu pu ki mi 《大君》(景行)

意富岐美 wu pu ki mi 《大君》(允恭)

意富岐美 wu pu ki mi 《大君》(清寧)

意富岐彌斯 wu pu ki mi ji 《大君し》(仁徳)

意富岐美能 wu pu ki mi - nuo 《大君の》(仁徳)

意富岐美能 wu pu ki mi - nuo 《大君の》(清寧)

意富藝多志比賣 wu pu gi ta ji pi me 《人名》(用命)

意富佐邪岐 wu pu sa za ki 《大雀》(応神)

意富多久美 wu pu ta ku mi 《大匠》(清寧)

意富多多泥古 wu pu ta ta ne ko o 《人名》(崇神)

意富斗能 書紀「大戸之」wu pu to nuo 《大殿》(神代)

意富那毘 wu pu ra bi 《年長のナビという人のことか。人名》(孝元)

意富泥 wu pu ne e 《大根》(仁徳)

意富富杼王 wu pu pu du o - nu o mi ko o 《人名》(応神)

意富麻幣 wu pu ma pe 《大前》(允恭)

意富麻幣 wu pu ma pe 《大前》(雄略)

意富美岐 wu pu mi ki 《大御酒》(応神)

意富美夜 wu pu mi ja 《大宮》(清寧)

意富牟盧夜 wu pu mu ru ja a 《大室屋》(神武)

意富夜麻登玖邇阿禮比賣命 wu pu ja ma tu o ku hi - a re pi me - nuo - mi kuo tuo 《人名》

(孝靈)

意富夜麻登玖邇は、大倭国のこと。

意富夜麻登久邇阿禮比賣命 wu pu ja ma tu o ku hi - a re pi me - nuo - mi kuo tuo 《人名》

(安寧)

意富韋古賀波良 wu pu wi ko ga pa ra 《大猪子が原。地名》(仁徳)

意布袁 wu pu wo (∧ wu pu - u wo) 《大魚》(清寧)

意富袁 wu pu wo 《大峰》(允恭)

意富阿麻比賣 wu pu - a ma pi me 《大阿麻姫か。年長者の姫か》(崇神)

「富」は「布」を充てた例もあるから「フ」と訓み、琉球語との対応の上から pu を表わしたとみれば都合がよい。古事記のこれらの wu pu - は、前代の七世紀・六世紀の形を留めたものであろう。古事記には、形容詞としての wu pu ji の例は見当らない。また、古事記には連体形の wu pu ki の仮名書例は見当らないが、崇神紀に「於朋耆」(wo po ki, ∧ wu pu ki) の例があるから、古事記言語には wu pu ki が用いられていただろう。

次に、wu pu - 系のものとは別形の《大きい》を示す語形を記述しよう。

与論方言

'u pi sj a または 'u pi sa (∧ wu pi sj a) 《大きいこと、大きくしていること。名詞》

('u pi ji 終止形) は用いられないが、以前には用いられていたかも知れぬ

'u pi sj a i (∧ wu pi ji - a ri) 《大きくしている。終止形》

'u pi sj a N (∧ wu pi ji - a mu ∧ wu pi ji - a mu u) 《大きくしている、大きくしているだろ

う、大きくしていると思う。終止兼推量形》

'u pi ku (∧ wu pi ku) 《大きく。連用形》

'u pi ku ji (＜ wu pi ku ji) 《大きくしている、大きくしているが故に。終止形と原因または理由を表わす具格形》

'u pi sj a ru (＜ wu pi ji - a ru) 《大きくしている。連体形》

'u pi sj a ra ba (＜ wu pi ji - a ra pa) 《大きくしているならば。未然の假定形》

'u pi sj a ri ba (＜ wu pi ji - a ri pa) 《大きくして有れば、大きくしているので。已然形》

'u pi sj a ri bo o (＜ wu pi ji - a ri po o) 《大きくしてしまっていると。完了の假定または已然形》

以上の活用形は原級のものであるが、次には、比較級のことを記そう。

'u Q pi i ji (＜ wu pi i ji) 《とても大きくしている。終止形》

ji は『《している》の意味を表わしている。

'u Q pi i ku (＜ wu pi i ku) 《とても大きく。連用形》

'u Q pi i ku ji (＜ wu pi i ku ji) 《とても大きくしている、とても大きくしているので（している

が故に）。終止形・具格形》

この種の原級や比較級の語形は、クシ語法とでも名付けられよう。

'u Q pi i sj u 'i (＜ wu pi i ji wu ri) 《とても大きくして居る。終止形》

'u Q pi i sj u 'N (＜ wu pi i ji wu mu u) 《とても大きくして居る、とても大きくして居るだら

う、とても大きくして居ると思う。終止形・推量形》

'u Q pi i sj u ru (＜ wu pi i ji wu ru) 《とても大きくして居る。連体形》

‘u Q pi i sj a ra ba (∧ wu pi i ji - a ra fa) 《とても大きくして有るならば。未然の仮定形》
など。

首里方言

? u hwi sa ‘N (∧ ‘u Fi sa ‘m ∧ ‘u pi sj a mu ∧ wu pi ji - a mu u) 《大きい。終止形》

なお、与論方言には、‘u Q pi i sj a 《とても大きくしていること。比較級の名詞》の形も用いられている。琉球語の「大きい」を示す語幹の、‘u pi - , ? u hwi - に対応する wu pi - の例は、古事記には用いられていないが、書紀には対応形が用いられている。

伽牟伽筵能 伊齋能干瀾能 於費異之珥夜 (神武紀)

この「於費異之」について、書紀には、謡意以^ニ大石^一 喻^ニ其国見丘^一 也 (神武紀)、と説明してあるから、「於費異之」は「大石」を示す語形であると見られる。これは、wo pi - i ji (∧ wu pi - i ji) の形で発音していただろう。wo pi ji (∧ wu pi ji) の終止形は書紀には記されていない。その他の活用形も記紀や万葉に見当らない。古事記には記されていないだけで、実際の古事記言語には wu pu - の語幹と共に、wu pi - の語幹も用いられていただろう。古事記以前には、wu pu ji や wu pi ji の終止形やその活用形が用いられていたかも知れぬ。「於費」の「於」は、wo を示す文字と見るべきであろう。

古事記の例

加牟加是能 伊勢能宇美能 意斐志爾

波比母登富呂布 志多陀美能 (神武)

「意斐志」は、*wu pi i ji* または *wu pi i ji* の形を示すものらしい。語幹の「大」を *wu pi i* で示している。斐字は乙類音を示す文字で、そのモーラは *pi i* または *pi* であろう。*wu pi* と *i ji* (石) の頭音の *i* までもいっしょにして、*wu pi i* とするのは誤りである。与論方言のように比較級を示すものであれば許される。しかし、書紀のものとの対応の上からは比較級を示したものと見るべきではあるまい。稗田阿禮は、*wu pi i ji* と旧辞を誦むべきものを、*wu pi i ji* と誦んだので、安萬侶はそれを忠実に乙類字の斐を用いて記録したのであろう。拙著『日本母語の探求——日琉語の比較——』には、意を *o* と記して置いたが、当時意は *wu* を示す文字であるとの考えは持っていた。急に新見を出すのはどうかと思つて従来の「オ」のつもりで *o* と記したのである。*wu* に改めるべきである。与論方言の *u pi* に対応する *wu pi* や *wo pi* は、あるいは、記紀時代には衰弱しつつあった語形であるかも知れぬ。

日本書紀には、意富を用いたのは次に示す一例のみである。

意富加羅(大加羅・垂仁)。*wu pu ka ra* 《大きい》の語幹を示す *wu pu* や *wu pi* は、古事記序文の述べているように先代の旧辞すなわち七世紀の古形であろう。八世紀の奈良朝語に入ると、*wu pu* の変化をした *wo pu* が用いられたため、古事記にはその語形が記述されている。なお、*wu pi* は、次第に用いられなくなつて行つたものようである。

古事記の *wo pu* の例

淤富岐美 *wo pu ki mi* 《大君》(雄略)

淤富岐美呂迦母 *wo pu ki mi ru o - ka mu o* 《大君ろかも》(仁徳)

淤富久邇奴斯 wo pu ku ni nu ji 《大国王》(神代)

淤富佐加 wo pu sa ka 《大坂》(殿中)

淤富泥 wo pu ne e 《大根》(仁徳)

淤富美夜比登 wo pu mi ja pi tu o 《大宮人》(雄略)

これらの「淤」字は、「意」との対応の上から「ヲ」と訓み、その音価は wo を表わしたとみれば都合がよい。上例の $\text{wo pu} - /$ は、八世紀初頭の中央方言の語形を伝えたものである。古事記言語以前の七世紀や六世紀の中央語では、「大」の語幹は、 $\text{wu pu} - / \cdot \text{wu pi} - /$ で表わしていたようである。

意富富等王(上宮記逸文)

これは、 $\text{wu pu pu tu o} - \text{nu o} - \text{mi ko o}$ の形で発音していたのであろう。

阿米久爾意斯波羅支比里爾波彌已等(元興寺露盤銘。推古四年。五九六年)

$\text{a mi e ku ni} - \text{wu ji pa ra ki} - \text{pi ru o ni pa} - \text{nuo} - \text{mi ku o tu o}$ の形で発音していたかも知れぬ。「意斯」は、 wu ji の形を示すものようである。六世紀末期の「大」は、 $\text{wu pu} -$ や $\text{wu pi} -$ の形で表わしていた可能性が強い。

意奴彌首(元興寺露盤銘)

意奴彌は、 wu nu mi の形で発音していたのだらう。「意」字は、 $\text{wu} -$ を示す文字として使用していたようである。

阿米久爾意斯波羅支比里爾波乃彌已等(天寿国曼荼羅繡帳銘)

前記の露盤銘のものと同じく、日本書紀の「天国排開廣庭天皇」のことで、後の諡を欽明天皇と申している。意斯は、「押シ」に通ずる形で *wn i* を示すものであらう。

七世紀や六世紀の伝存された遺文の中に、「意」字は僅少の例を示しているのみであるが、実際の言語生活には多く用いられ、*wn* を表わす文字として用いられていたと見なければならぬ。古事記には「意」字を多量に用いているが、これは、七世紀末期の語形を伝えたもので、古事記の古さを証明する一つとなっている。ところが日本書紀には、*wn pu* の例は一例あるのみで、他はすべて *wo po* - (*wn po* *wn pu*) に変化した形のみが用いられている。

日本書紀の語形

於朋耆妬 (大君) *wo po ki to o* (崇神)

於朋耆瀾 (大君) *wo po ki mi* (仁徳・推古)

於哀企瀾 (大君) *wo po ki mi* (允恭)

飫哀枳瀾 (大君) *wo po ki mi* (雄略)

飫哀枳瀾 (大君) *wo po ki mi* (雄略・武烈)

於朋枳美 (大君) *wo po ki mi* (繼體)

飫朋佐介 (大坂) *wo po sa ka* (崇神)

於朋佐箇 (大坂) *wo po sa ka* (崇神)

飫哀陁擲 (大太刀) *wo po ta ti* (武烈)

於朋泥(大根) wo po ne e (仁徳)

於保比屢咩能武智(大日靈貴) wo po pi ru me - nuo - mu ti (神代上)

於朋摩幣(大前) wo po ma pe (安康)

飫哀磨陞(大前) wo po ma pe (雄略)

淤朋瀾枳(大御酒) wo po mi ki (応神)

於朋瀾赴泥(大御舟) wo po mi pu ne (仁徳)

於朋務露夜(大室屋) wo po mu ro ja a (神武)

於朋望能農之(大物主) wo po mo nuo nu ji (崇神)

「物」は、古事記には「母能麻袁須」(仁徳)の例がある。これは、mu o nu o の形を示すのであろう。

古事記の形に対応する書紀の「物」は、mo o nu o の形で表わしていたと見るのがよいかも知れぬ。

以上の書紀の wo po - (大)は、後世に継がれて行く語形である。

その他の古事記の「意」字使用の語形

意岐《沖》wu ki (神代)

与論 'u ki (〱wu ki)

首里 ? u u ci (〱'u ki〱wu ki。沖縄語辞典による)

意岐都登理(沖鳥) wu ki tu tuo ri (神代)

意岐米(置目) wu ki mi e (顯宗)

意佐加能(忍坂の) wu sa ka - nuo (神武)

意須比(襲) wu su pi (景行)

淤須比(襲。神代) wo su pi (w u su pi) の新形も用いられている。

「大」を示す語幹の wu pu - や wo po - は、「多シ」の語幹としても併用されている。次にその例を示そう。

伊知佐加紀 微能意富祁久袁(記神武)

意富祁久《多けく》は、wu pu ke e ku の形で発音していたのではなからうか。古事記の「祁」字は ke e を表わしていたとみれば、与論方言との対応の上から都合がよい。

伊智佐介幾 未廼於朋鷄句塙(神武紀)

於朋鷄句《多けく》は、wo po ke e ku (w u pu k i e ku) の形で発音していただろう。この書紀の語形は新しく変化したものを示している。

与論方言

'u pu gi i ku (w u pu gi i ku) 《多いらしく、多いそうに》

右の記紀の例は、「多いこと」の意に解されているが、いかがなものか。終止形の「多シ」の例は見当たらないが、古事記言語には wu pu ji が実際には用いられていただろう。古事記以後の書紀や万葉では、wu pu - から新しく変化した wo po ji 《多し》が用いられていたようである。

於保伎(多キ。wo po ki。連体形。万・三七五九)

於保久(多ク)。wo po ku。連用形。万・三七六〇)

意保伎(多キ。wu po ki。連体形。続紀七詔)。頭音には wu- の古形が保たれている。

与論方言

'u pu sa (<wu pu sa) 《多いこと、多くしていること。名詞》

'u pu sa 'i (<wu pu sa ri <wu pu sj a ri <wu pu i - a ri) 《多くしている。終止形》

'u pu sa 'N (<wu pu sj a 'm <wu pu ji - a mu <wu pu ji - a mu u) 《多くしている、多くしているだろう、多くあると思う。終止と推量形》

* a mu u は、「有思」を示すものである。何となれば、「おもう」の意味が含まれているから。

('u pu ji <wu pu ji 終止形。今は用いられていないが、以前には用いられていただろう)

'u pu ku (<wu pu ku) 《多く。連用形》

'u pu ku ji (<wu pu ku ji) 《多くしている、多くしているので、多くしているが故に。終止形

と具格形を兼ねる》

('u pu ki <wu pu ki 連体形。今は用いられない)

'u pu sa ru (<wu pu sj a ru <wu pu ji - a ru) 《多くしてある(いる)。連体形》

'u pu sa ra ba (<wu pu sj a ra ba <wu pu ji - a ra pa) 《多くして有るならば。未然の假定形》

'u pu sa ri ba (<wu pu sj a ri ba <wu pu ji - a ri pa) 《多くして有れば、多くなつて有るの
で。已然形》

'u pu ɛa ri bo o (＜ wu pu sj a ri bo o＜ wu pu ji - a ri po o) 《多くなつてしまつて有る》、
すでに多くして有れば。完了の假定形または已然形》

次に、過去形を示そう。

'u pu sa ta 'i (＜ wu pu sj a ta ri＜ wu pu ji - a ta ri＜ wu pu ji - a 'i tj a ri＜ wu pu
ji - a ri ti - a ri (多し有りテ有り) 《多くなつて有つたのである。終止形》

'u pu sa ta 'N (＜ wu pu sj a ta mu＜ wu pu ji - a ta mu＜ wu pu ji - a 'i tj a mu＜ wu
pu ji - a ri ti - a mu u (多し有りテ有思) 《多くして有つた、多くなつて有つたと思う。終止形・推
量形》

'u pu ɛa ta ru (＜ wu pu sj a ta ru＜ wu pu ji - a ta ru＜ wu pu ji - a 'i tj a ru＜ wu pu
ji - a ri ti - a ru (多し有りテ有ル) 《多くして有つた。連体形》

次に、比較級の語形を示そう。

'u Q pu u ji (＜ wu pu u ji) 《とても多くしている。終止形》

比較級の終止形には、- ji が接尾されて《している》の意味が表わされているから、以前の原級形の終
止形にも - ji が接尾されていただろう。

'u Q pu u sj u 'i (＜ wu pu u ji ju ri＜ wu pu u ji wu ri (多し居リ) 《とても多くして居る。
終止形》

'u Q pu u sj u 'N (＜ wu pu u ji wu mu＜ wu pu u ji wu mu u (多し居思) 《とても多くして

居る、とても多くして居るだろう、とても多くなつて居ると思う。終止形・推量形」

'u Q pu u ku (∧ wu pu u ku) 《とても多く。連用形》

'u Q pu u ku ji (∧ wu pu u ku ji) 《とても多くして居る、とても多くして居るので、とても多くなつて居るが故に。終止形・具格形》

'u Q pu u sj u ru (∧ wu pu u ji ju ru ∧ wu pu u ji wu ru) 《とても多くして居る。連体形》
'u Q pu u sj u ra ba (∧ wu pu u ji wu ra ba) 《とても多くして居るならば。未然の仮定形》

那覇方言

ウフサン 《多い》(外間守善『おもろ語辞書』)

オモロ語

島、おへく。「おへく」(連用形)は、'o fi ku または 'u fi ku の形で表わされていたのではなからうか。

与論方言の《多くしている》の意味を表わす終止・具格形の原級や比較級には、-kuji 接尾の語形が表わされている。これを「クシ活用」または「クシ語法」と名付けることも出来よう。与論方言に見られるいろいろの活用語形は奈良朝文献には見当らない。しかし、与論方言の原形のもの、古代琉球語や日琉共通基語には用いられていたと見なければならぬ。与論方言にのみそれらが用いられている筈はないから。

万葉集の「意」字使用の語形

都地爾 意加米移母 (五・八一二)

意加米 (置かめ) は、wu ka mje の形で発音していたのではあるまいか。

布多都能伊斯乎 意可志 (五・八一三)

意可志 (置かし) は、wu ka ji の形で発音していたかも知れぬ。与論方言のものは、^uka ji (<wu ka ji) で用いている。

宗奈波良能 意吉由久布彌遠 (五・八七四)

意吉 (沖) は、wu ki の形を示すものであろう。与論 ^uki (<wu ki)。首里 ɿnu ci (<^uki <wu ki)。

知知波波袁 意伎旦 (五・八九一)

意伎 (置き) は、wu i の形を示す例であらう。与論方言 ɿi (<wu i)

意枳都布可延 (五・八一三)

意枳 (沖) は、wu i の形を示すのであろう。

国乃 意久迦袁 (五・八八六)

意久迦 (奥處) は、wu ku ka の形で発音していたのだらう。与論方言の「奥」は、^uku (<wu ku) で表わしている。

美夜故摩提 意久利摩遠志旦 (五・八七六)

意久利 (送り) は、wu ku ri の形で発音していただらう。与論方言では、^uku ri (<wu ku ri) ㇿ

たは ^uku i ([^] wu ku ri) で、首里方言は ^uku i ([^] ^uku ri [^] wu ku ri) で、表わしている。

意乃何身志 ^イタ ^バシ ^ケレ ^バ 伊多波斯計禮婆 (五・八八六)

意乃 (已) は、wu nu o の形で発音していただろう。

等利都都伎 ^イタ ^バシ ^ケレ ^バ 意比久留母能波 (五・八〇四)

意比 (追ひ) は、wu pi の形で発音していただろう。与論方言では ^ui ([^] wu i [^] wu pi) で表わしている。

志都久良 宇知意伎 (五・八〇四)

意伎 (置き) は、wu ki の形を示すのであろう。

佐那周伊多斗乎 ^イタ ^バシ ^ケレ ^バ 意斯比良伎 (五・八〇四)

意斯 (押し) は、wu i の形で発音していただろう。与論方言では ^ui ([^] wu i) で用いている。

比等爾邇久麻延 ^イタ ^バシ ^ケレ ^バ 意余斯遠波 (五・八〇四)

意余斯遠 (老よし男) は、wu ju o ji wo の形で用いていたかも知れぬ。

意保保斯久 ^イタ ^バシ ^ケレ ^バ 計布夜須疑南 (五・八八四)

意保保斯久 《ほんやりと》は、wu po po ji ku ([^] wu pu pu ji ku) の形で発音していただろう。

意保々斯久 ^イタ ^バシ ^ケレ ^バ 伊豆知武伎提可 (五・八八七)

久礼奈為能 ^イタ ^バシ ^ケレ ^バ 意母提乃宇倍爾 (五・八〇四)

意母提 (表) は、wu mo o te ([^] wu mu o te [^] wu mu u ti) の形で発音していただかも知れぬ。万葉

卷五の「母」字は「毛」と區別され、古事記のものと似ているようであるが、ここにはそれ以上述べない。与論方言、^u mu ti (∧ wu mu u ti)、首里方言 ^u mu ti (∧ wu mu u ti) で、表わしている。

意夜能目遠保利 (五・八八五)

意夜 (親) は、wu ja の形で発音していたのだろう。与論方言は ^u ja (∧ wu ja) で、首里方言は ^u ja (∧ wu ja) で、表わしている。

京師乎美武等

意母比都都……

意母比都都

奈宜伎布勢良久 (五・八八六)

意母比 (思ひ) は、wu mo o pi (∧ wu mu o pi) の形で発音していたのだろう。与論方言は、^u mu i (∧ wu mu pi ∧ wu mu u pi) で、首里方言は ^u mu i (∧ wu mu Fi ∧ wu mu u pi) で、表わしている。

意母布

故我多米

(五・八四五)

意母布度知

加射之爾斯呂奈

(五・八二〇)

意母布 (思ふ) は、wu mo o pu (∧ wu mu o pu) の形で表わしていたのだろう。与論方言は、^u mu (∧ wu mu u) で表わしている。

迦久斯母何母等

意母閉騰母 (五・八〇五)

意母閉 (思へ) は、wu mo o pi e (∧ wu mu o pi e) の形を示すのであろう。

千年爾母何等

意母保由留加母

(五・九〇三)

意母保由留 (思ほゆる) は、wu mo o po ju ru の形で表わしていたのだろう。

以上の万葉卷五の「意」字の例は二二の多数に上っている。卷五以外の万葉集に用いられた「意」字には、次に示す例がある。

意吉都之良奈美（沖つ白波。十七・三九八九）

意枳都之良奈美（沖つ白波。十七・三九九二）

意吉麻呂（人名か。十六・三八二六）

比等欲毛意知受（十五・三七三八）

意知受《欠けず、欠落せず》は、wu ti nu の形で発音していただろう。

意保伎美能 美己等可之古美（二十・四四〇三。信濃国防人）

意保伎美（大君）は、wu po ki mi（／wu pu ki mi）の形を示すのだろう。

意富伎美乃 之許乃美多旦等（二十・四三七三。下野国防人）

伊能知波 意母知知我多米（二十・四四〇二。信濃国防人）

意母（母）は、wu mo の形で発音していただろう。

奈苦古良乎 意伎旦會伎怒也 意母奈之爾志旦（二十・四四〇一。信濃国防人）

安必意毛波受 安流良牟伎美乎（十八・四〇七五）

梅柳 乎理加謝思底婆 意毛比奈美可毛（十七・三九〇五）

人社者 意保爾毛言目（七・一二五二）

意保《いいかげんな》は、wu po の形で発音していただろう。

以上の「意」字は、古い形の an のモーラを示すものであろう。「沖」は、 an en wo en wo の変化をして、後世の o en が生じている。

風土記に用いられた「意」字の例

意支都奈彌イセツナミ（沖つ波。常陸国風土記）

意字郡イジゴロ（出雲国風土記總記）

意字は、 an の形を示すのだろう。

意字社イジシャ（出雲国風土記意字郡）

意恵登詔イヱトウ、故云意字イジ（出雲国風土記意字郡）

意陀支社イダシ（出雲国風土記意字郡）

意字川イジカハ（出雲国風土記意字郡）

意支都久辰イセツクニ為命ミコト（出雲国風土記嶋根郡）

伊農意保須美比古イヌイホスミヒコ佐和氣能命ミコト（出雲国風土記秋鹿郡）

意美豆努命イミヌミ（出雲国風土記出雲郡）

伊努意保須美比古イヌイホスミヒコ佐倭氣能命ミコト（出雲国風土記出雲郡）

意保美社イホミヤ（出雲国風土記出雲郡）

意保美小川イホミノガハ（同上出雲郡）

意保美浜イホミハマ（同上出雲郡）

意能保浜（同上出雲郡）

意美豆努命（同上神門郡）

意字軍團（同上卷末記）

意登比賣能古素（肥前国風土記松浦郡）

以上の「意」は、すべて / wi / のモーラを示すものであらう。

二、「富」字とその音価

古事記の「富」字は、従来「ホ」と訓まれてきた。その音価については *ho* と考えられていた。しかし、筆者は上記のように琉球語との対応の上から「プ」と訓み、その音価を *pu* と推定したい。以下に古事記の「富」字使用の語例を琉球語と比較してみよう。「意」字と共に「富」字を多く用いてある古事記は、やはり古い文献であることを証明している。

「すぐれた、めでたさ」を示す語形

夜邇波母美由 久邇能富母美由（記応神）

久邇能富は、古典文学大系『古事記祝詞』によれば、「国の秀」にあて、国のすぐれたところ、国讃めの歌である、と解している。『時代別国語大辞典上代編』には、目立つところ、ひいでたものの意をあらわす。内容的・実質的にすぐれたもの、すぐれているところ、と解説してある。

単独に用いられた上例の「富」は、次に示す与論方言との対応の上から、pu u の形で発音されていたのではないかと見られる。

与論方言

pu u 《幸運、めでたさ、すぐれたもの、など》

'u rja'a si ma nu pu u de e ru 《それは、島の（郷里の）幸運（めでたさ、だから、など）である》
pu u には、目立つもの、すぐれたもの、幸運、めでたさ、などの意が含まれているようである。'u rja a は、'u ri (∧ su ri か) の語形変化形で、《それが、それは》の主格の意味を表わす形である。両言語の上から、古代琉球語や日琉共通基語においては、*ndu の形で表わしていたらう。

「女陰」を示す語形

裳緒忍_ニ垂_ニ於_ニ番登_一也（記神代）

天服織女見驚而、於_レ梭衝_ニ陰上_一而死。訓_ニ陰上_一云_ニ富登_一（記神代）

突_ニ其美人之富登_一

名謂_ニ富登_一多多良伊須須岐比賣命_一、亦名謂_ニ比賣多多良伊須氣余理比賣_一。是者惡_ニ其富登_一云事_一、後改_レ

名者也（記神武）

因_レ生_ニ此子_一、美蕃登_一、此三字見炙而病臥在（記神代）

御陵在_ニ畝火山之美富登_一也（記安寧）

古事記には、富登が四例、美富登が一例、番登が一例、美蕃登が一例、記されてある。これらは、pu

tu o・mi pu tu o・po tu o・mi po tu o' の形を示すものであろう。これらの中で、pu tu o と mi pu tu o とは、前代（七世紀）の語形を留めたものようである。po tu o (∧ pu tu o) と mi po tu o (∧ mi pu tu o) とは、八世紀の語形を記したものではないかと見られる。女陰のごとく丸く盛り上がった丘をも pu tu o といっていたようである。祝詞鎮火祭には御保止（みほとど）が見えている。これは、mi po tu o の八世紀の形を示したものらしい。

与論方言

pu tu (∧ pu tu n) 《男の陰茎。麦屋字の形》

bu tu (∧ pu tu ∧ pu tu n) 《男の陰茎。一般形》

pu o または po o (∧ pu o tu ∧ pu u tu u ?) 《女陰》

与論の現行形では、pu tu または bu tu は男の陰茎を示し、女陰を示すには pu o または po o を用いている。古い時代では、男の陰茎を pu tu n で女陰を pu u tu n で示して区別していたものか、それとも男女のものに共通して *pu tu n または *pu u tu n で表わしていたものか、明らかにしたい。

平安朝語

陰カミ今案、玉茎、玉門等通称也・蔭也・言其所_レ在蔭翳也（和名抄）

このように説明してあるのをみると、男女に共通して用いられていたようである。

その他古事記の「富」の例

意富斗能地（イフツノチ）（大殿道。神代）

wu pu to nu o di i の形か。与論 'u pu tu nu (∧ wu pu tu nu u 大殿)

意富加牟豆美命 (神名。神代)

富良富良 (pu ra pu ra 神代)

夜知富許能迦微能美許登 (神名。神代)

ja ti pu ku o - nu o - ka mji - nu o - mi ku o tu o

登富登富斯 (遠々シ。とても遠くしている。比較級形か。神代)

tu o pu tu o pu ji の形で用いていたのだろう。与論方言では 'tu 'u tu 'u ji (∧ tu u pu tu u pu ji)

《とてもとても遠くしている。最高級》。比較級は tu wu u ji (∧ tu u pu u ji) の形を用いる。

淤富久邇奴斯 (大国主。wo pu ku ni nu ji。神代)

會富騰 (そほづ。su o pu du o。神代)

意富祁久 (多けく。神武)

意富牟盧夜 (大室屋。神武)

母登富呂布 (廻ろふ。mu o tu o pu ru o pu。神武)

母登富理 (廻り。神武)

意富臣 (書紀には多臣。wu pu - nuo - wo mi。神武)

意富夜麻登久邇阿禮比賣命 (安寧)

意富那毘 (人名。孝元)

意富阿麻比賣（人名。崇神）

意富多多泥古（人名。崇神）

意富美和之大神（神名。崇神）

淤富岐美（大君。仁徳）

淤富佐迦（大坂。履中）

登富禮（通れ。tu o pu re 允恭）

与論 tu 'u ri (∧ tu Fu ri ∧ tu u pu ri。連用・命令)。または tu 'u i (∧ tu Fu ri ∧ tu u pu ri 与論・首里の形)

古事記の神名や人名は、前代に記録して置いたものを記したと見え、当時の語形が多量に留められているようである。以上の例の「富」は、pu を示すものと見れば琉球語に一致する例が多い。推古朝の言語を記録した資料がもっと多く残っておれば、それには琉球語と対応または一致する形が多量に見出されるであろう。古代本土語は、時代を古く溯れば溯るほど、琉球語に共通する言語様相を帯びていたように見られる。

万葉集の「富」字使用の例

意富伎美（大君。二十・四三七三。下野国防人）

志富夫禰（潮舟。ji pu bu ne。二十・四三六八。常陸国防人）

等富都比等（遠い人。昔の人。五・八五七。tu o pu tu pi tu o）

富己呂倍（誇ろく。pu ku o ru o pi e。五・八九二）

富^フ之伎^シ吉^キ美^ミ爾^ニ (欲^ユしき君^{キミ}に。二十・四四九)

pu ji ki ki mi。与論方言は、pu ji ku (連用)。pu ji ku ji (終止・具格)。pu si a ru (〈 pu ji - a ru。連体) などの形で用いられる。

富^フ等^ト登^ト藝^ギ須^ス (霍公鳥。pu tu o tu o gi su。二十・四四三七)

天^ア雲^ウ乎^フ 富^フ呂^ル爾^ニ布^フ美^ミ安^ア多^タ之^シ (十九・四二三五)

富呂爾は、はらはらと、ばらばらと、などの意に解されている。

風土記に用いられた「富」の例

宗^ソ我^ガ富^フ (播磨国風土記揖保郡)

大^オ田^タ村^{ムラ}與^ヨ富^フ等^ト (同上揖保郡)

阿^ア富^フ山^{ヤマ} (同上託賀郡)

柚^ユ富^フ郷^{サト} (豊後国風土記)

那^ナ富^フ乃^ノ夜^ヤ社^{シャ} (出雲国風土記意宇郡)

これらの「富」も pu を示すものであろう。

以上の「富」字は、琉球語との対応の上から「プ」と訓み、／pu／で表わしていたと見れば一致点が出て都合がよい。古典文学大系『萬葉集四』の四二五頁から四二六頁にかけての注の説明には、次のように記されている。

富は広韻、方副切。呉音ではフの音。しかし、富は詩経では克・特・熾・忌・疑と押韻している。つ

まりこれらの音は *o* の韻を持っていた文字であり、日本語ではオ列乙類 *o* にあたるものである。従って富も、古い音では中心母音に *o* を持ち、日本語のオ列乙類を書くことができたのであろう。蕉同和も、これを *piwəg* → *piwəu* という変化を経たと推定している。これによれば富はホの乙類にあたる。従って、上宮記で意富富等（オホホト）・乎富等（オホト）・上宮太子系譜で佐富（サホ）、大宝二年御野戸籍帳で意富麻呂、養老五年下総戸籍帳で富會売（ホソメ）。古事記で富（ホ）などに使われたのであろう。日本書紀垂仁紀に、意富加羅（オホカラ）とあるのも古い用字をそのまま取入れたのであろう。……統紀宣命では五十一詔（宝龜二年二月）に於母富佐（思ほさ）・止富良須（通らす）の二例がある。しかし、富をホの仮名に使うのは古い字音の体系によることであり、新しい字音では *hi* の音となり、日本語のフの音に近くなったので、万葉集の大部分の卷々ではホとしては保を使い、日本書紀では、歌謡や訓法には一度も使用しなくなった。これは、中国の字音の変化によって、日本での使い方に変化の起きた一つの例である。

右の論考は果して正しいものであろうか。筆者は、そのようには考えたくない。生きた琉球語と比較して推定するのが、正しい言語学的な研究方法であろうと思う。文字のみの上からの研究では、どうしても不完全にならざるを得ない。奈良朝本土語やそれ以前の本土日本語を研究する上に、琉球語を抜きにした研究方法は片手落のものであるといわなければならぬ。